

1995年1月17日5時46分 夜明け前のまちに、走った激震

まちを襲った未曾有の大地震、そのときどんなことが起きていたのでしょうか。最前線勤務していた職員に話を聞きました。

消防

周囲を取り囲む炎、空を覆った黒煙。経験したことのない火災



消防局長 濱田 宗徳

就寝中、突然の大きな衝撃で目が覚めました。激しい揺れが収まって、窓の外を見ると市街地に4、5本の黒煙が見えました。家族に避難所に行くように伝え、すぐに原付に乗って出勤しました。

長田署に到着し、すぐにも水を掛けたいと思い、署の前の消火栓を開けました。水が流れてきます。水を確保するため、署の横を流れる新湊川をせき止めるために、新湊川は底と両側面がコンクリート張りなので、下に降りるにははしごが必要で、重さ20kgの土のうを降ろしていく作業は困難を極めました。



懸命の消火活動(長田区)

川をせき止めた後、まだ消火活動に着手できていない現場に向かいました。後で知ったのですが、火災件数は震災発生直後の15分間で54件でした。これは

年間に発生している火災の約8%に相当します。本来であれば、部隊を組んで出勤しますが、火災の数が多過ぎて人手が足りず、4人で消火に向かいました。軒下も家を守りたくて、路地の中に入って、後退させられるという状況を何度も繰り返しました。消火活動中に見える光景は、燃えている炎と空を覆い尽くす黒い煙、その中から時折のぞくオレンジ色の太陽だけでした。30年間務めてきましたが、周囲360度が全て燃えているような現場は経験したことがありません。歯が立たず、太い道路のところで延焼を阻止するというになりました。全ての人を助けたかったし、全ての火

阪神・淡路大震災の概要

地震の概要	
発生日時	1995年(平成7年)1月17日 午前5時46分
震源	淡路島(北緯34°36'、東経135°02')
震源深さ	16km
規模	マグニチュード7.3
震度	6(一部地域で7)

人的被害	
死亡者	4,571人(うち約7割が家屋倒壊による)
行方不明者	2人
負傷者	14,678人
避難者	599カ所、236,899人(ピーク時)

建築物	
全壊	67,421棟
半壊	55,145棟

火事	
火災	175件
全焼	6,965棟
半焼	80棟
部分焼	270棟
ぼや	71棟
延べ焼損面積	819,108㎡

※人的被害・建築物・火事は神戸市内

1995年1月17日、いつもと変わらない朝を迎えるはずだったまちは、20秒にも満たない揺れにより、その姿を大きく変えてしまいました。多くの人の命を奪い、住まいを、仕事を奪い、生活基盤に甚大な被害を与えたのです。

病院

院内に入りきらないほどの被災者。止まった電気、時間とともに増えていく犠牲者



西市民病院 看護師 山下 美香

震災発生時は寮にいました。周囲の建物が倒壊しているのを見て、まずは病院に行かなければと考え、歩いて病院に向かいました。普段通っている道は、倒壊した家屋の残骸でふさがれ、広い道に迂回して病院に向かいました。病院に着くと、すでにたくさんの市民の方が来ており、自分たちが院内に入ることさえも難しいほどでした。



震災直後の西市民病院

停電し、明かりは非常電源の豆球のみになりました。室内が暗くて処置ができません。朝日が入ると、救急の処置を始めてしばらくすると

間に移って対応を続けました。電気が使えないため縫合に使う道具の滅菌ができません。どうしても必要な人に限り、消毒液に浸して使うことを医師が本人に説明の上、縫合を行いました。当初は負傷者が多かったのですが、時間の経過につれて病院に到着した時点で亡くなっている人が増えていきました。夕方になると最寄りの小学校が避難所に指定され、病院に避難を求めて来た人、また、近くの高校が遺体安置所に指定されたので、遺体を車に乗せて何度も往復して運びました。

避難所

大勢の人が生きていけるのか。水も電気もない学校



住吉中学校校長 中溝 茂雄

想像を絶する災害の前に、目の前の負傷者の対応で必死でした。今でも、振り返ると一人一人に十分な対応ができていたのだろうか、痛みを我慢していた人はいなかったのだろうか、と医療に携わる者として自問自答することがあります。

り、知っている人に呼び止められて、救いの手伝いも行いました。学校に着くと、避難する人が集まってきており、その日のうちに2000人以上の方が来られました。まず体育館、次に会議室へ、次から次へと部屋を空けて入ってもらいました。水が使えず、昼すぎにはトイレが詰まり使えなくなり、パケツに運び、流してもらうようにしましたが、とても追いつかず、中学生や高校生にも手伝ってもらい、何時間もおトイレの掃除をしました。電気・ガスも止まっています。街灯も消えた。午後は5時を過ぎると真暗な世界でした。懐中電灯で救急医療チームの手元を照らしたり、遺体を運んだりもしました。避難所には50体くらいのご遺体が運



人であふれる学校体育館(中央区)

び込まれました。二度にこんな人が亡くなる場面に出会ったのは生まれて初めてのこと、足が震えました。水も電気もない中で、これだけ大勢の人が生きていけるのだろうか不安でしたが、何とかして避難してきた人の衣食住を確保しなければならぬという思いでした。地震前の1月13日に三年生の理科の授業で地震の話をしました。その中で地震は起こり得ることだと説明はしましたが、17日にこんなことになるとは思いませんでした。授業では命の大切さ、命を守らなければならないことまで伝えられていなかったことが今も心残りです。

感謝を込めて

阪神・淡路大震災では国内外から多くの支援を受けた神戸。震災後5カ月でボランティアの数は延べ12万人を超え「ボランティア元年」といわれました。被災地に職員を派遣



がれきの撤去

市は、世界中からいただいた支援に感謝の気持ちを持って、国内外で発生した自然災害に対して職員の派遣などを積極的に進めています。平成23年3月11日に発生した東日本大震災の被災地には、これまでに延べ1874人の職員を派遣。今も土木、建築などの専門知識を持った職員14人が現地でも復興支援に従事しています。派遣にあたっては、阪神・淡路大震災を経験した職員と、経験していない職員がペアで活動し、災害時の経験や対応ノウハウを伝えるなどの取り組みも行っています。

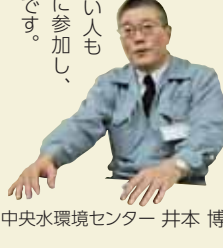


給水活動

福島県で下水道の復旧を支援して 災害時は現場の状況を見て判断する力が必要です。若い人も積極的に災害支援に参加し、経験を積んでほしいです。



下水道河川部保全課 木下 裕介



中央水環境センター 井本 博

久元市長の 神戸を想う



記憶の継承、そして貢献
あの震災から二十一年の歳月が流れました。震災への対応と今後の復興に苦勞された皆様、ありがとうございます。退かれ、新しい世代を迎えよう。私たちが、月日が経つと止めることはできませんが、記憶を留め、受け継ぐことが、被災者や被災地の復興に貢献することです。被災者の経験とそこから得られた教訓を、次の世代に引き継ぐことが、被災者の苦難を乗り越え、被災地の復興に貢献することです。被災者の経験とそこから得られた教訓を、次の世代に引き継ぐことが、被災者の苦難を乗り越え、被災地の復興に貢献することです。

被災地では、震災から復旧した神戸への期待の大きさを感ずる。その一員としての自覚を持って成長していきたいです。



語り部 NPO法人「神戸の絆2005」 岩本 しず子さん

私は戦争を経験したので、就寝時には服や靴などを近くに置いてあります。震災の時も服を着替えて外に出ることができました。災害時には日ごろから備えているものが生きてきます。助け合いもそうです。普段から自分も人も大切にできる人が、いざというときに助け合えるのだと思います。震災から20年、経験した人が少なくなっていく中、経験を語り、命の尊さ、備えの大切さを伝えていきたいです。

減災 ～命を守るために

阪神・淡路大震災で亡くなった方のうち、約80%は住宅の倒壊が原因でした。また、いつ起こるか分からない地震に備えて、自身の、そして大切な家族の命を守るため、住まいの耐震化を進めましょう。

市が行っている住まいの耐震化のためのサポート

- (1) 家具固定の補助…最大1万円。65歳以上の入居者、障害のある人、小学生以下の子どもがいずれかがいる世帯が対象
 - (2) 家具固定専門員の派遣…地域で5戸以上まとまって申し込み。(1)の対象世帯は2家具まで無料
 - (3) 無料耐震診断
 - (4) 設計費・工事費の補助
- (3)(4)は昭和56年5月31日以前に着工した住宅が対象
※申請方法など詳細はすまいるネットへお問い合わせください

講演会「やってみようすまいるの中の安全対策」無料
日時 1月22日(木) 14:00～ 場所 国際会議場 401号室
申し込み はがきか電話かFAXか電子メール (taishin@kobe-sumai-machi.or.jp)で、住所・氏名・電話番号・FAX番号・参加人数を記入し、すまいるネット(〒651-0096 雲井通5-3-1)へ。1月15日(木)必着。抽選

聴いて学ぶ 震災20年ラジオイベント
緊急時の情報収集に欠かせないラジオ。関西のラジオ局のキャスターによる阪神・淡路大震災に関するトークセッションを行います。耐震化や減災に関する情報を発信します。ラジオ本体と電池の状態も確認しておきましょう
日時 1月16日(金) 18:30～、ラジオ関西
1月17日(土) 17:00～、ラジオ大阪

すまいるネット(☎222-0186、☎222-0106) 耐震化促進室(☎322-6608、☎322-6094)